今、ここにある幸せ

高橋　美羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
今、ここにある幸せ

【Nコード】
N0462D

【作者名】
高橋　美羽

【あらすじ】
長くて14、5年の命と言われているモユ。奇跡的に16歳の誕生日を迎える事ができたモユが願った事とは…

…ささやかな願い

モユ・16歳…

私は、小さい頃から、すでに籠の中の鳥だった。鳥は鳥でも羽のない鳥…

羽のない私は、物心付いた時には、病院…という籠の中にいた。

『…モユちゃんの頭の中に悪い虫がいてね、その虫をね、パパとママや先生、それから看護師さんとで、やっつけてるんだよ。モユちゃんの頭の中の、悪い虫が早く逃げていくように、みんなで頑張ろうね』

そう言っていた両親の瞳は、私に涙を見せまいと、必死だった。

それが何を意味するものなのか…理解できない程、幼い子供だった私。

我が子に向かって、頭の中に悪性の腫瘍がある…と告げ、理解させるには、酷な事だっただろう。

生まれながらにして、親不孝だった私…

だから私は、どんなに辛い治療も、頑張った。わがままなんて言

わなかった…

弱音なんて吐けなかった…

担当の医師からは、長くもって、１４、５年と言われた命…

１６歳になったばかりの今も、こうして生きていられる私がいるのは、神様のおかげなのだろうか？

『モユちゃん。これはね、モユちゃんの頑張りが奇跡を起こしたんだよ…』

担当の先生が微笑みながら言ってくれた。

ふと目をやると、窓の外には、制服を着た学生達が見える。

今は、下校の時間なのだろう。仲間同士、楽しそうに笑っている姿、手を繋いで帰る、幸せいっぱいの恋人達…

病室の窓から見える、穏やかな時間の流れの中で、自分が明日、この世からいなくなるかもしれない…と毎日、思いながら生きている人なんて、きっといないだろう。

ごく普通に学校へ行き、勉強したり、友達と騒いだり、たまには喧嘩をしたり…

それから…

好きな人と恋愛したり…

限られた時間の中での、ささやかな願い…

幸せすぎて、このまま死んでも構わない…と思えるような恋愛がしてみたい。

でも、私は籠の中の羽のない鳥なのだ。

短い命と知りながら、人を好きになる事なんて、できない…

いつも通り、過ごすだけだ…

今日も一日…生きることができた事に、感謝して…

…ただ、それだけだ。

今日は、目覚めがいつもの朝とは少し違っていた。

とても幸せな気分になる夢を見たのだ。

誰なのかはわからないが、私と同い年くらいの男の子と、楽しそうに笑っている…

どうやら2人は、恋人同士の設定らしい。

彼は、俯きながら自分の胸に手をあてている…

私が彼を呼びかけて、彼が顔を上げようとした時…

そこで、夢から醒めてしまった。

夢の中の出来事とはいえ確かに2人は付き合っていた。

もう一度、夢の中での出来事を思い出してみる…

私の中にある何かが、一点に集まったかと思うと、それが波紋のように広がっていく。

小さい輪は、だんだん大きくなり、身体に隅々まで行き渡ると、何ともいえない気持ちになった。

その気持ちが、会った事もない彼に恋をしていると自覚するのに、さほど時間はかからなかった。

あの日から毎日、私は彼の夢を見続けた。

夢の中の2人は本当に幸せそうに笑っている。

相変わらず、胸に手をあてる仕草が何なのかは、わからないが。

夢の中の彼は、ありのままの私を受け入れ、今までの辛さや悲しみも優しい眼差しで包んでくれた。

彼は多くを語らず、ただ私の側で微笑むだけ…

でも、私はそれだけでも幸せだった。

十分すぎるほど、幸せだった…

人を好きになる事の素晴らしさを、彼は教えてくれたから……

人って、自分が幸せだと誰かに幸せを分けたくなるんだね。

これからは、たくさんの人達に、幸せを与えられるような……そんな人に、私はなりたい。

いつもと変わらない、穏やかな秋の日の夕暮れ…

私は、１６年と２ヶ月という、短い生涯を終えた。

　でも……

これからなのだ。

私自身はいなくなっても、私の心臓は生き続ける。

夢に出てきた彼の身体の一部として、彼と共に。

…これからも、ずっと。

…共に生きて

セナ・１７歳…

１年前…僕は生まれ変わった。

生きられる…という、力強い希望と共に。

『…あの…セナさんですか？』

バス停で待っていた僕に、女の人が尋ねてきた。

『はい、そうですが…』

入院していた病院の看護師さんだったかな?

一度見た顔は、忘れない自信はあったんだけど…

『…えっと、すみません、どちら様で…』

『私、…モユの母親です。ずっと、セナさんにお会いしたかった

んです』

静かに微笑むと、その人はゆっくりと語り始めた。

『…本当は、臓器移植された方に会うことを、病院側に止められていたのですが……モユの遺品を整理していましたら、生前、モユが書いていた日記が出てきまして…これを読んでいただけたら…と』

手渡された、白い表紙のノート。

彼女の好きな色だったんだろう…

表紙をめくると、綺麗な字で、彼女の見た夢の内容が書いてあった。

目に浮かぶような情景、彼と彼女の仕草…

そして、最後のページ…

意識が無くなる前に書いたものなのだろう…

震える字で、この世に生まれてきて良かった事、今まで自分を見守ってきてくれた人への感謝の言葉。

それから…

『幸せをありがとう』

夢の中での恋人にあてた言葉。

となりのページには、夢の中の彼らしき絵がスケッチされていた。

僕は息を飲んだ。

『その絵、あなたに似てるでしょ…』

この絵を見て、思い出した事がある。

移植手術を受けた後、不思議な夢を見たのだ。

色白の、髪の長い女の子と僕が一緒にいる…

彼女が絵を描いていて…

描き終わったと思ったら、急に彼女が立ち上がり

『先に行ってるね』

と言い残してスーッと消えたのだ。

彼女が描いた絵を見てみると、そこには僕の顔…

そう、この絵だ…

『モユはね、あなたが心臓が悪い事、なんとなく分かっていたみたいですね。

モユは……亡くなる前に、自分の臓器を必要としている人達に提供したい…そう言ってたんです』

僕の頬に涙が伝う…。

…提供者は、モユさんだったんだ。

胸に手をあてて、モユさんの温もりを再確認した。

『モユは、セナさんに心臓を提供できた事、とても喜んでいると思います…』

…胸の奥が熱くなった。

僕に、生きる希望をくれた人…

僕は、これからも生き続ける…

力強く…

モユさんと共に…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0462d/

今、ここにある幸せ

2010年12月18日14時47分発行